

## 令和元年度 学校評価報告書（総表）

令和 2 年 6 月 1 日

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属聴覚特別支援学校	校長名	鄭 仁豪
幼児・児童・生徒数	232	学級数	40
2 教育目標等			
① 学校教育目標	聴覚障害のある幼児児童生徒の心身の発達段階に応じた最も適切な方法で教育し、進んで自分の能力を開発し広い視野に立って文化的・生産的活動に寄与できる人間の育成に努める。また、これら目標達成のための教育実践を通して、筑波大学の教育研究に寄与する。		
② 学校経営方針	<p>(1) 筑波大学の教育・研究に協力する附属学校として聴覚障害教育の実践的研究に取り組み、さらに3つの教育拠点構想（先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点）を踏まえた学校経営を進める。これらの研究成果を国内外に向けて発信する。</p> <p>(2) 学校教育目標を達成するため、各学部の具体目標を定める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚部：話し言葉を通して日本語の基礎を習得させることに努める。</li> <li>・小学部・中学部：障害の状態に配慮した指導のもと、小・中学校と同じ教育課程によって教科学習を進め、同学年の健聴児童生徒と同等の学力が身につくよう努める。</li> <li>・高等部：生徒一人一人の進路と能力・適性に合った教育課程によって、進学や就職などの実現に努める。</li> </ul>		
③ 重点目標	<p>(1) 人工内耳装用児に対する指導法の研究（文部科学省委託事業）を実施する。</p> <p>(2) 学習指導要領改訂における教育課程充実に向けての検討を行う。</p> <p>(3) ICT教育の更なる推進を行う。</p> <p>(4) 出張授業等による広報活動の強化を図る。</p> <p>(5) 地域社会との協力関係を強化する。</p>		
④ 前年度（平成30年度）の成果と課題	<p><b>【成果】</b></p> <p>(1) 高等部専攻科生徒が台湾にわたり聾学校等を訪問し交流を行った。 専攻科生徒は、整備した車椅子を台湾の福祉団体に寄贈する活動なども行った。国際協調と国際貢献に対する意識を高めることができた。</p> <p>(2) 乳幼児教育に特化した全国規模の研修会を実施した。医療、福祉、教育関係者と協議を深め連携強化につながった。</p> <p>(3) 季刊「聴覚障害」誌の発刊・学校紀要・文部科学省共催の講習会・全日本聾教育研究会北海道大会等において、自校の教育実践や研究成果を公表した。</p> <p><b>【課題】</b></p> <p>(1) 教員の指導力向上を目的とした研修内容の充実。</p> <p>(2) 隣接する学校や地域社会への貢献。</p> <p>(3) 少子化等からくる入学希望者の減少について。</p>		

### 3 重点目標達成についての総括的評価

令和元年度において人工内耳装用児に対する指導法の研究（文部科学省委託事業）を実施した。本研究においては筑波大学をはじめ、専門の教授陣と共同研究することにより、全国調査とその結果の分析を行い、中間報告書を発刊し、全国の特別支援学校（聴覚障害）に還元することができた。昨年度得た知見を2年目となる令和2年度は、本校での実践研究につなげる。

学習指導要領改訂における教育課程充実に向けての検討と実践を行った。特に2020年度全面実施の小学部においては、令和2年度の本校主催の研究会で実践報告をする予定である。

ICT教育の更なる推進を行うため、高等部を中心とした2年目となる文部科学省の委託事業を実施した。中学部においても従来からICT教材を用いて思考力を培う指導実践を重ねている。高等部専攻科歯科技工科においては科研費奨励研究に採択される実践があった。

また、出張授業等による広報活動では、好評を得ており参加した地方の聾学校の生徒が本校を見学したり受験したりすることにつながった。

### 4 令和2年度の学校課題

人工内耳装用の低年齢化の実態を踏まえ、令和元年度に行った全国調査と分析に基づいた幼稚部を中心とする人工内耳装用児への指導・支援の実践的研究を本格化する。高等部専攻科入学生徒増に向けた取組を強化する。高等学校新学習指導要領を踏まえた教科指導の研究と教育課程の検討と実践に取り組む。

### 5 学校課題に向けての具体的な取り組み

人工内耳装用児の言語活動の現状と課題について全国調査を踏まえた実践研究を幼稚部を中心に行う（文部科学省事業2年目最終年度）。人工内耳装用児の指導上の配慮事項について明らかにし、言語指導の内容と工夫点についても具体的に検討する。広報委員会を新設し、学校紹介ビデオの改編やホームページ等の広報活動を強化する。また、次期学習指導要領に向けた実践研究を行う（文部科学省特別支援教育に関する実践研究充実事業3年目最終年度）。また、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための休校措置に伴って必要とされた遠隔による学習支援についての本校の取組から得た知見を集積し、今後の本校の教育活動や発信に生かす。

### 6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- (1) 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要発行
- (2) 季刊誌「聴覚障害」年間4回発行
- (3) 新学習指導要領に示される聴覚障害の状態に応じた言語活動の充実～人工内耳装用児に対する全国調査と実践研究に基づいて～研究成果報告書（中間報告）

# 学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和元年度

学校名	筑波大学附属聴覚特別支援学校
-----	----------------

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-7	コンピュータや情報通信ネットワークを効果的に活用した授業の状況	発達段階や障害特性を踏まえた教科指導や教材・教具の開発に努めた。特に中学部、高等部ではタブレット等を積極的に授業に取り入れ、ICT教育の推進に取り組んだ。高等部英語科では、文部科学省の委託事業においてタブレットを用い、英語の文字でのやり取りを通して、主体的対話的で深い学びができた。次年度は、他の教科にも広げる。高等部専攻科歯科技工科職員において科研費奨励研究に採択される実践があった。
3-1-4	保護者や地域社会、関係機関等との連携協力の状況	隣接する学校や地域自治体との連携を強化し、幼児児童生徒の安全な教育環境整備に努めた。市川市や警察署と連携して通学路の安全確保整備や情報交換を行った。国府台コンソーシアムに属する学校等と防災、地域活性化について会議を持ち、連携（情報共有等）を深めることができた。
6-1-2	医療、福祉など関係機関との連携の状況	医療や福祉関係者との連携を強化し、その知見や情報を広く社会に還元した。特に乳幼児教育相談部においては、早期教育研修会を主催し、聴覚障害者自立支援センター職員等とも情報交換ができた。大学附属病院耳鼻科医や言語聴覚士の参観を受け入れたり、本校職員研修の講師に招いたりして、医療との連携を強化することができた。
8-1-1	授業研究の継続的实施など、授業改善の取組の状況	教員の授業力・専門性向上を目的にした研修を行った。研究授業を継続して実施して、授業改善に取り組んだ。各研修会への積極的な参加を促し、特に全日本聾教育研究会高岡大会に多くの教員が参加し知見を得るだけでなく、11件の研究発表を行い、助言者等から評価を受けることにより自己研鑽につながった。
10-1-1	学校に関する様々な情報の提供状況	パンフレットやホームページ、出張授業等、広報活動を強化した。保護者や学校評議員等の意見や要望を取り入れ、ホームページやPTA 広報誌、PTA 部長会等を通して幼児児童生徒の学習成果や活躍の様子を広く周知した。
14-1-4	教員養成・教師教育	教育実習や介護等体験学生への指導の充実を図った。特別支援学校教員等、聴覚障害教育関係者に対する専門性向上へ寄与するため、全日本聾教育研究会本部事務局を担当している。また、文部科学省共催の講習会等において研究成果を発信したり、全国の特徴ある専攻科を有する学校から担当者を招きシンポジウムを開催したりして高い評価を得た。
14-1-5	国際交流・国際貢献	交流協定を締結している教育機関との交流を一層深めるとともに、国際貢献活動に寄与する活動として「空飛ぶ車いす」活動を継続した。生徒間交流において、韓国ソウル聾学校とのスカイプ交流やフランスパリ聾学校との相互訪問交流を実施し、生徒主体の活動を多く取り入れるとともに、異文化を認め合う意識や国際貢献に対する意識をより高められる指導を行うことができた。